

地泊碇、い、し、優



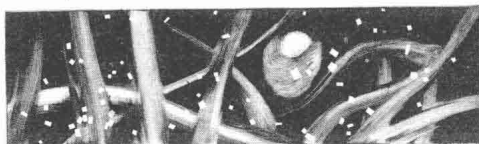
ep. 2000

Tetsuro Kawai

弘 上 坂



優しい 淀泊地



坂上 弘



優しい淀泊地

一九九一年七月一〇日 第一刷印刷
一九九一年七月十五日 第一刷発行

著者 坂上 弘

発行者 福武總一郎

発行所 福武書店

東京都千代田区九段南二一三二八
〒三三三電話(三三三)三〇一三三
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

製本 加藤製本

平版印刷 栗田印刷

(落・乱丁本はお取替えいたします)
(定価はカバーに表示しております)

坂上弘(さがみ・ひろし)
一九三六年、東京に生まれる。慶応義塾大学文学部哲学科卒業。大学在学中から創作活動をはじめ、五五年、「息子と恋人」が第33回芥川賞候補作、五九年、「ある秋の出来事」が第4回中央公論新人賞を受賞。八一年、「初めの愛」で芸術選奨新人賞受賞。著書として『澄んだ日』『朝の村』『早春の記憶』『優しい人々』『杞憂夢』『突堤のある風景』などがある。

優しい碇泊地
目次

天狗 無垢 陷穽 海綿

201

133

83

7

装画
装丁
駒井哲郎
山崎英樹

優しい碇泊地

海
綿

その朝、誰もいない会議室の電話が鳴っていたので、一体誰からだろうと思って、受話器をとった。ぼくは受話器を耳にあてるときに、窓から空を見上げる癖がついていた。英語を流暢に喋る野々山の、おまじないのような仕草をまねていた。

「もしもし、こちらは、アーチ・ウーリイです。あなたが探しているのにぴったりの教師です」

むろんぼくに、最初からそのわかりにくい名前が聞きとれたわけではない。

その電話は、前日ぼくの働いている会社が英字新聞に出した英語教師募集の広告への応募だった。しかし、もう締切った後だった。

いつもなら、新米のぼくでなくても、応募者の電話を直接とったりはしない。録音テープにとっておいて、それを聞いただけでふるいにかける。そうしないと、何十人、ときには百人をこえる男女の応募者をさばくことはできない。これをやるのは教務主任マイケル一人の仕事である。

すでに前日中に会議室に移した録音テープつきの電話でその選別が済んで、二、三人の候補が朝から面接に来ることになっていたので、断ればよかったのだが、ぼくは、声の主に対する興味から、それができなかった。

最初にとびこんできたのは、元気のよい声だった。調子が外れているとはいえ、この明るさはいいな、と思った。語尾を鼻にかかるようにして上にあげてのばす。こういう底抜けの明るさを単純に好む教育担当者は、ぼくたちの顧客には多い。

「もう一度、お名前を」

「ウーリイ、スベルはU……」

「おお」これはぼくのよくわからないときの感嘆詞だ。相手も「おお？」と問い返して、会話が混乱してしまう。

「ところで、ぼくの仲のいい友だち、グッドウッド氏があなたの学校に働いていたはずだが」それ以上のことは、このアーチイと名乗る男について、ぼくは知り得なかった。ふかく考えもせずに、ぼくは、マイケルを彼の本だらけの執務部屋から呼んで、電話にでももらった。彼は威厳をもって応対していた。

ふつうの応募者は条件を知りたがる。時間給はいくらか、勤務場所はどの辺りか、教える相手の実力はどのくらいか、自分のところからどのくらい時間がかかるか、といった点について、できるだけくわしく知っておく必要があるからだ。しかし、マイケルが話している相手

は、こんな内容を話しているのではなかった。冗談まじりの会話らしく、マイケルは満足気に笑っていた。

「彼は、ヨーロッパ人？」

ぼくはきいた。

「当り。あれはドイツ人だよ。英語はマアマアだが、ドイツ語の教師としてつかうのがいい。ドイツに赴任する人の集中訓練なんかが、ピッタリの役だろうな。野々山さんにきいてみよう。バンコックから旅行してきて昨日成田に着いたばかりだそうさ。ふつうだったら雇うつもりはないけど、野々山さんがビザの申請にうごいてくれるかも知れない。たしか、集中研修を一人、どこかの会社から頼まれていたはずだ。……この男、ボンで日本人女性のガールフレンドがいたといっている」

選別係としてのマイケルは、慎重な青年だ。相手と距離をおく術を心得ている。彼は、教鞭をとってもトップクラスだが、余程の場合でないと教えに行かない。自己評価をキチンとして、質の高い仕事にしか手を染めない。たとえば、高度な教課要項づくりとか、手づくりのテキストづくりとかである。社長の野々山が信頼している秘蔵っ子でもある。去年入ったばかりのぼくは、野々山・マイケルラインに入れてもらえない。小さな会社で最も嫌いなところは、こういう人間関係の力学がきっちりでき上っていて、時には不愉快にさせられることだ。

ぼくは大学を卒業する頃、三十歳になるまでに一流の経営コンサルタントの会社に納まりたいと思った。できればパートナークリッシュをもつコンサルタントになって。それには、二年ずつ区切って、語学修得、ビジネススクール留学、実社会での経験、と計画してみた。机の上でのこの計画は悪くないと思った。とくに、社会にでた最初の二年間は、学びながら金を貯めることのできる語学教育会社が望ましい。ぼくの英会話力などは、幼稚園児以下の通じ方でしかないのだから、この選択は間違っていないはずだ。

マイケルは、プリンストン大出身なので、このぼくの目標設定をよくわかってくれた。彼がよく対する態度には、向うの大学ではふつうなのかも知れない、親切な上級生然としたところがある。しかし、ぼくがなにか無神経な行動にでるとあからさまに嫌な顔をして、敵愾心を示す。十歳も年齢の差があるのに、ニベもない。日本にいて、日本人の癖が嫌いになる、という外国人は多い。

ここにきて間もない頃、ぼくは野々山の秘書の加寿子と、マイケルについて話をしたことがある。つい彼女にいいところを見せようとして、口がすべった。「マイケルは、日本人以上に、日本的なところがありますね」ぼくはいかにマイケルの繊細なところに感心しているか、日本人にある、他人のことを考える姿勢に適合しているか、と彼の性質の説明をした。実際、彼の、よく気がつくところに、感心していたのである。

「何もわかっていない癖に、生意氣なことを言つて欲しくないわ」

加寿子は、ぼくなど眼中になかった。

「ぼくはただ、マイケルの態度を評しただけです」

「あんな男のどこがいいのですか」

加寿子に対して敬意こそ表すれ、見下すつもりなど全くなかったにもかかわらず、彼女はぼくの言うことに、まるで子供に裏切られた母親のように、激昂した。そしてぼくをやりこめるために自分をさらけだして、ぼくにみじめな思いをさせた。

「わちは婦国子女のなれの果てですがね。あいつらが何を考えているかわかるのよ。ロクに計算もできない癖に金にきたなかつたり、日本のことをわかつたふりして心では輕蔑していた。あんたにはまだ彼等の、行動と態度のちがいで、わかつちやいないのよ。彼等は行動だけはわたしたちに合せてかわつてきていますよ。しかし価値観は變化していません。一緒に寝てみなきゃわかんないわよ」

単にザックバランといえる話の内容だが、ぼくはあわてた。加寿子の脂気のない髪が肩にふりかかっているのをみて、一瞬その髪にかくれた顔から、毒矢でもでてくるのではないかと思つた。ぼくは彼女を自堕落な女と考えたりしたくなかつた。

「おお。それ以上いわないでください」

ぼくは彼女を落着かせるのに精一杯だった。野々山にもマイケルにもみられない、加寿子の

さらけ出し方をみせられたのが、哀しかった。彼女はスヌービーのコーヒー茶碗をもって、笑っていた。ときどき事務所には、そうやってコーヒーを飲むぼくと加寿子しかないときがあって、きわどい話もするし、会社にいるということを忘れていた。

マイケルが日本を目差して流れついたとき、加寿子がロマンチックな感情を彼に与えたことは想像するに難くない。ただし、これは、確かめようもない。噂だけが厳然とあり、誰もそれを否定しない以上、噂は一人歩きしている。新入りのぼくが、いまた、その噂を本気にして、ひっかかった、と加寿子は誤解した。

ぼくのマイケル評はすぐ加寿子からマイケルの耳に入った。

マイケルはぼくに釘を差した。

「お前に関係ないだろう、ひよこちゃん」

「ぼくもまったく興味ないね。個人的なことに」

ぼくはそのとき、彼とは友だちになるまいと思った。彼の友情を必要としない人間になろうと。彼としては精一杯の日本語をつかって、ぼくを見下した以上、それに応じてやらなくてはならない。もちろん、死語にちかいひよっこということばで見下されたことに単純に応えたのではない。彼が日本で求めているものは、豊かな生活なのだ。安定した収入と満足の行く仕事によって自分をまもるといふ生活を彼は自分のゴールとして信じている。それがぼくや加寿子や、他の教師たちとの和を犠牲にして成り立つものであっても、それをやりとげようとしてい